

ご存知ですか？かくれ脳梗塞

「無症候性脳梗塞について」



社会医療法人全仁会 倉敷平成病院

名誉院長(脳神経外科) 鈴木 健二

■無症候性脳梗塞とは？

無症候性脳梗塞とは、CTやMRIなどの画像検査を受けた際に、直径が3mm以上の脳梗塞があり、症状がない場合を言います。そのうち約80%は、ラクナ梗塞(穿通枝)と呼ばれるタイプの脳梗塞です。無症候性梗塞は小さい梗塞なので、症状を出さないことも多く、このことから症状のない梗塞、すなわち「かくれ脳梗塞」とも呼ばれています。

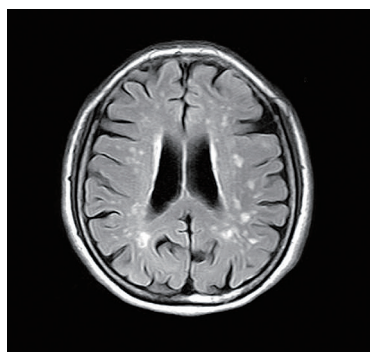
■原因

危険因子として最も関連が深いのが加齢と高血圧です。高血圧が長く続いたために、脳の中を走る穿通枝という細い動脈が詰まったせいでラクナ梗塞が起こります。また、中には脳の重要な動脈(主幹動脈、内頸動脈や中大脳動脈など)の狭窄、あるいは、それが詰まったせいで起こった脳梗塞の場合もあります。他の危険因子としては内頸動脈狭窄、喫煙、

糖尿病、不整脈(心房細動)、HDL(善玉コレステロール)低値、高脂血症、高尿酸血症などもあげられます。

■脳ドック検査による発見

脳ドックでCTやMRIの検査をすると、手足の痺れや頭痛などの脳の異常を疑わせる自覚症状が全くない人でも、小さな脳梗塞がしばしば発見されるようになってきました。これが脳ドックで最も発見される異常の中で最も頻度が高い「無症候性脳梗塞」です。(画像は脳ドック受診でみられたMRI画像です)。



無症候性脳梗塞のある人は、そうでない人に比べて、症状が現れる本格的な脳梗塞を発症するリスクが高いことがわかっています。したがって、無症候性脳梗塞が発見されたら、高血圧、糖尿病、脂質異常症、心臓病などの脳梗塞の危険因子がないかどうかの検査も行い、もし危険因子が一つでも見つかったなら、その病気の治療に専念し、生活習慣を改善しながら脳梗塞の発症防止に勤めることが重要です。症状が無くても過去に脳梗塞を起こしている場合は、

脳梗塞の再発の恐れは大きくなりえます。脳ドックなどの検査で古い病変を発見できれば、再発予防の治療を開始することができ、すなわち脳卒中中の予防につながります。

■予防対策

①日常生活において生活を見直す

無症候性脳梗塞が発見されたらすぐ治療を要するものではありませんが、将来の脳卒中の発症との関連が深いといわれています。その発症予防や無症候性脳梗塞の再発予防のため、危険因子の管理、特に高血圧のコントロールが重要です。塩分を控えること(推奨は一日あたり6g)、水分を意識して摂ることなど、生活習慣を見直すだけで血圧が安定することもあります。他にも禁煙や飲酒を控える事も大切です。また、他の

危険因子、すなわち糖尿病や高脂血症などの危険因子がある場合はこれらのコントロールも必要です。

②脳ドックや健康診断を受ける

もし脳卒中に発展してしまうと、治療を受けても、病前の状態まで回復できないことが多いので、発症を防ぐために事前予防をすることが重要になります。そのためには脳卒中の早期発見が可能となる健康診断や脳ドックを定期的に行うことを推奨しています。また脳ドックを受けることで、受けた方ご自身が脳卒中を予防するための意識が向上になり、健康に対してより意識が高まるという効果も期待できます。とくに家族に脳卒中で倒れた方がいる場合や、糖尿病などの生活習慣病を患っている方の場合、脳梗塞や脳卒中から身を守るために一度脳ドックを受けてみるという良いでしょう。

